

<幼児教育>

表現する楽しさを味わうための援助の工夫

— 児童文化財の活用を通して —

宜野湾市立宜野湾幼稚園教諭 角本 伸枝

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究仮説	1
III	研究構想図	2
IV	研究内容	3
1	幼児の表現について	
(1)	幼稚園教育要領「表現」のねらい	
(2)	表現のもつ意味	
(3)	幼児の表現	
(4)	イメージと表現	
2	児童文化財の活用	
(1)	児童文化財の教育的意義	
(2)	主な児童文化財	
3	協同する表現活動とは	
(1)	個の遊びから集団の遊びへ	
4	表現することを楽しむために	
(1)	表現するために必要な要素	
(2)	表現を育てる教師の援助と環境構成	
(3)	家庭との連携	
5	幼児の実態把握と分析	
(1)	実態調査アンケートについて	
(2)	アンケートの結果と考察	
V	検証保育	9
VI	仮説の検証	14
1	児童文化財の活用	
2	協同する表現活動	
3	検証のまとめ	
VII	研究の成果と今後の課題	20
1	研究の成果	
2	今後の課題	
	<参考文献>	

＜幼児教育＞

表現する楽しさを味わうための援助の工夫

－児童文化財の活用を通して－

宜野湾市立宜野湾幼稚園教諭 角本 伸枝

I テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領』の領域「表現」において「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とあり、その「ねらい」には、「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」とある。

豊かな感性や自己を表現する意欲は、幼児期に自然や人々など身近な環境とかかわる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことによって育てられる。反面、幼児期は、周囲の目が気になって自分を発揮できない場面が見られるようになる時期でもある。そこで、幼稚園では、感じたことや気持ちを友達や教師と共有し、表現し合うことを通して、豊かな感性や表現力を養うことが求められている。ところが、文部科学省の幼稚園教育の現状と課題において、集団とのかかわりの中で自己発揮する力が不十分であることが指摘されている。表現することは、自分の思いや考えを伝え、人とのかかわりをもつコミュニケーション力を培うものであり、就学以降の生活においても重要なことであると考えられる。

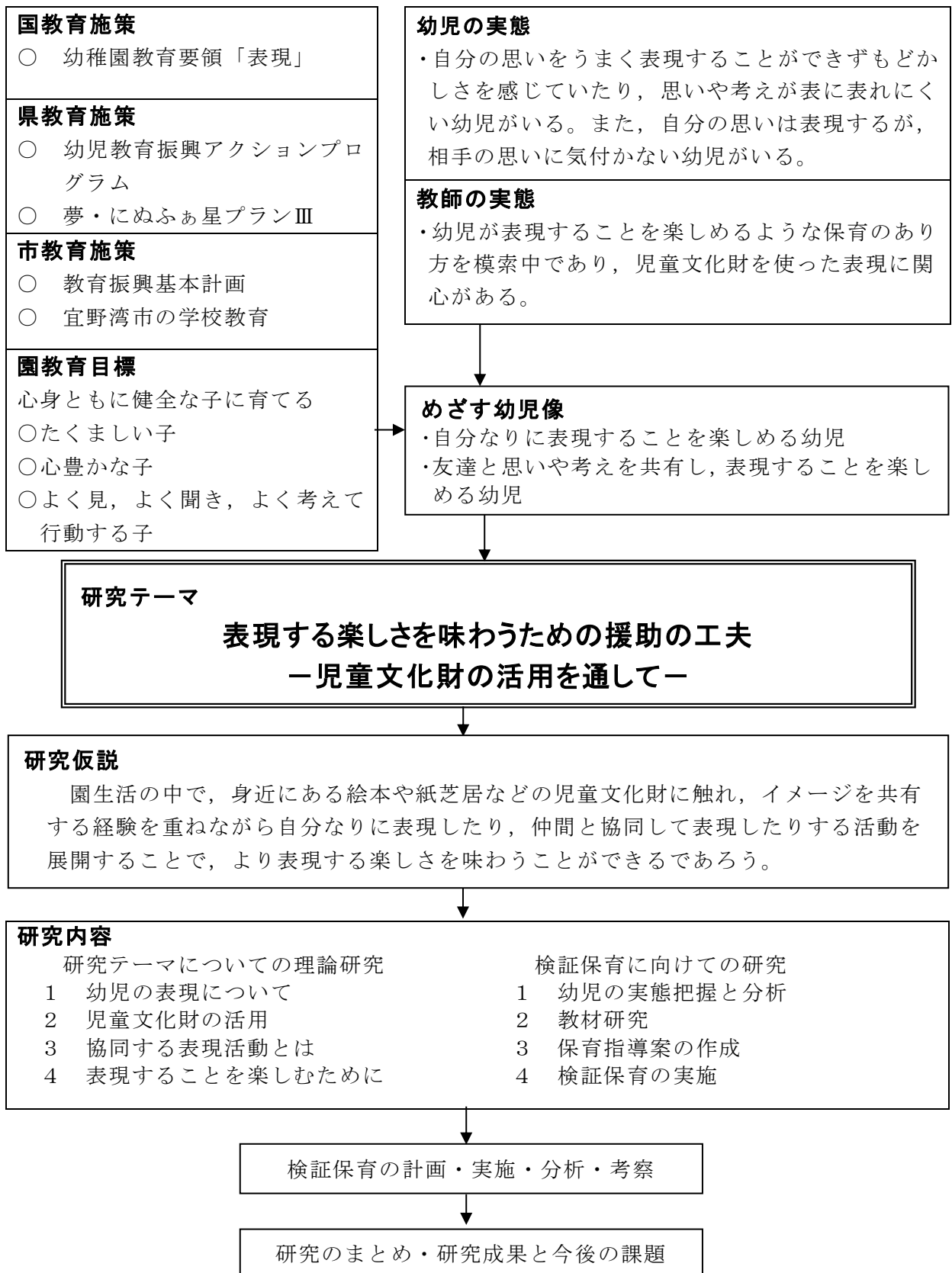
本園の子ども達は、人とのかかわろうとする意欲はあるが、自分の思いをうまく表現することができずもどかしさを感じている子や、自分の思いは表現するが相手の思いに気付かない子がいる。それは、表現方法が分からなかったり、周りが気になって表現できなかったりといったことも考えられるが、集団の中での自己表現の場が少なかったことも要因としてあげられる。実際、今までの保育を振り返ると、自分なりの表現ができるような手立てができていなかったこと、教師が中心になって活動を進めることが多く、子どもの気持ちや考えをくみ取れず、表現したいという気持ちをおさげりにしていたことなどが反省点としてあげられる。表現する楽しさを味わうためには、幼児が心を動かされる環境や安心して過ごすことができる環境（人的、物的、空間的）を構成していくことが大切である。

そこで、本研究では保育の場でよく使われ、幼児にかかわりの深い児童文化財を効果的に活用していく。その中で、幼児が自己発揮し、表現したくなるようなイメージをつくり出す経験や感動、楽しさなどの気持ちを共有する体験を重ねていけば、表現する楽しさを味わうことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

園生活の中で、身近にある絵本や紙芝居などの児童文化財に触れ、イメージを共有する経験を重ねながら自分なりに表現したり、仲間と協同して表現したりする活動を展開することで、より表現する楽しさを味わうことができるであろう。

Ⅲ 研究構想図



IV 研究内容

1 幼児の表現について

(1) 幼稚園教育要領「表現」のねらい

『幼稚園教育要領』の領域「表現」には、「感じことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と記されている。実際に幼児は毎日の生活の中で身近な環境にかかわりながら、様々なことを感じ、心を動かしている。そして、自分なりのイメージを言葉で表現したり、描いたり作ったり遊びに使ってみたりと様々な表現を楽しんでいる。

幼児は自分自身のイメージを表現する楽しさを味わい、充実感を味わうことによって、表現する意欲が育つ。先生や友達、周りの人と表現の楽しさを共有しながらいろいろな物の見方が広がり、感性が豊かになっていくのである。

(2) 表現のもつ意味

表現とは、「自分が心の中に感じることを、思うことを心の外の何かに置き換えて表すこと」である。日常生活の中で、誰もが表情・身振り・言葉など気持ちを表しながら生活している。表現は特別の活動に限定されるものではなく、日常生活の中でいつも何気なく繰り返されている行為である。表現によって、人は感じることを、思うことを伝えることができる。

表現とは、単なるコミュニケーションを図るためだけの行為ではない。思いを満たし、願いをかなえる行為である。このことから、表現は自己実現、自己充足の行為であるといえる。このような重要な意味をもつ表現であるが、発達段階における差異は認められるのか。幼児期における表現の意味について考察してみたい。

(3) 幼児の表現

表現に関する人の行為には、意図や目的なしに表れる「表出」と呼ばれるものと、意図や目的を持って表れる「表現」とがある。幼い赤ん坊の場合は、全てが表出であるが、次第に表現と呼ばれる表しが見られるようになる。幼児期には、人とかわる中で、自分の感じることを相手に伝えるために、目的を持った表現をするようになる。そして、その表現が自分の意図したものとなるように、どのような手段で表せばよいのか、内容や方法についても考えながら表現するようになる。その中で様々な表現の手段を習得し、そうすることで表現の幅を広げていく。幼児期は、表現という存在と表現という行為を学んでいく時期であり、自分の表しの行為を社会化していく時期である。

表現という営みは、一人一人がそれぞれに様々な感じ、考えるところから生ずる活動である。表現を交わし合うことによって人間としての生活を成り立たせ、豊かにしていくのである。内面で感じられていることは、表現されることによって、自分にとっても他者にとっても明らかになる。内面の世界は表現する過程で広がったり、確かになったりする。このことから、幼児期の子どもの感じたり考えたりする行為は表現によって育っていくととらえられる。表現の豊かさは、心の豊かさの反

映であり、表現の育ちは心の育ちであるといえる。

現代社会は、情報機器が豊かになり、幼児でもゲームやインターネットを容易に扱える環境になっている。一方で、引きこもりが増え、人間関係が希薄になるなど様々な問題を抱えている。幼児期に自己表現することを楽しみ、表現を豊かにしていくことは、人と人をつなぐコミュニケーション力を育て、小学校以降の生活へ向けても大きな意味を持つといえる。幼児は表現することを通して、様々な能力を獲得していく。その根底にあるのはイメージ力である。次に、イメージと表現について述べてみたい。

(4) イメージと表現

久富（2009）によるとイメージとは「過去の経験の中で記憶していることを思い出して再現することである」と述べられている。幼児期は具体的な何かを手がかりにものを考える時期だとみなされている。表現はイメージに基づいたものであり、表現する力を育てる上で、イメージの豊かさは欠くことができないものである。教師は、幼児が様々なイメージを持てるように援助していくことが必要であり、幼児のイメージづくりをどう援助するかが、表現活動のもとになる。幼児はそれぞれ異なったイメージを持っており、遊びの中で表現し合うことを通して自分のイメージを相手に伝えたり、また、相手のイメージを知ることができる。お互い刺激し合うことにより、イメージが共有されたり、発展されたりして表現は豊かになっていくといわれている。

そこで本研究では、幼児に馴染みのある絵本や紙芝居などの児童文化財の価値を明らかにし、幼児のイメージづくりを援助しながら友達とのイメージの共有につなげていきたい。

2 児童文化財の活用

(1) 児童文化財の教育的意義

『保育用語辞典第5版』によると、児童文化財とは「子どもの健全な心身の発達に深いかかわりをもつ有形無形のもの、技術、活動などの総称。おとなが子どものために用意した文化財や子どもが自分の生活をより楽しくするために創りだした文化財がある。広義には、子どもの生活における文化事象全般。一般にはより狭義に、遊び、お話、玩具、図書、紙芝居、人形劇、音楽、映画、テレビ、ビデオなどを指す」とある。

また、徳安（2005）によると、「幼児教育の中における児童文化財とは、子どもを取り巻く環境の有形・無形の内容であり、子どもの発達に正の方向性を与える可能性をもつものである」と述べている。子どもは園生活の中で、児童文化財とのかかわりを通して、「教師との信頼関係を深め、安定した情緒の拠り所を獲得していく。また、友だちとの活動が生き生きとなり、そこに社会性が発達していく。豊かな想像力も、この児童文化財との出会いの中で培われる」と述べている。さらに、「遊びを通した生活の中での児童文化財との関わりは、感覚的発達や認識の発達、言葉に対する刺激を受けていく」とある。これらから考えると、児童文化財が幼児

の発達や興味に即しているか、幼児がどう成長するかなど、適時に効果的に活用するためにしっかりと吟味する必要がある。

先に(4)「イメージと表現」の中で、教師は幼児が様々なイメージを持てるように援助していくことが必要であり、幼児のイメージづくりをどう援助するかが表現活動のもとになると述べた。絵本や紙芝居などの児童文化財を活用することにより、言葉のもつイメージ形成力が乏しい幼児の理解を少しでも高めて、そのお話の世界をわかりやすくすることで、イメージを思い浮かべたり、広がりをもつことがより可能となると考える。そして、そこから自ら身体を動かし、何かになったつもりになるなどして、表現することを楽しんだりすることができる。

以上のことから、様々な児童文化財を効果的に保育の場に活用することは、表現する楽しさを味わうために価値あることと考える。そこで、本研究では、実際に幼児が児童文化財を使って遊んだり、実際に作ってそれを遊びに取り入れる中で、自分なりに表現する楽しさを味わえる機会と場をつくっていききたい。

(2) 主な児童文化財

検証の際に活用予定の文化財の特性と表現における教育的意義について『絵本、童話、紙しばいの指導』および『保育用語辞典』を参考に表1にまとめた。

表1 児童文化財の特性

①お話	物語を覚えて幼児に語ることをいう。視聴覚教材などを一切用いず、人の声のみで語る。視覚的な制約がないことは、言葉に自然と集中してお話を楽しむことができたり、聞き言葉から自由にイメージをつくり出したりすることができる。お話には、快いリズムカルな言葉の繰り返しや韻律などが使われていることも多く、豊富な語いや表現力を養うのに大きな力となる。
②絵本	絵本のほとんどは文字も書かれているが、文字のない絵本もあるように、本来は絵によってその内容やストーリーを読み取れるようになっていく本である。幼児は文字が読めなくても、この絵を手がかりに、様々な想いをめぐらし、想像の世界を楽しむことができる。絵本は、感覚、知覚、記憶、表象、言葉などを使って幼児が絵と文を読み取りながら、想像の世界を楽しむものである。
③紙芝居	画面が絵本に比べて大きく、登場人物の動きが強調されているので、学級全体の幼児が見るのに適している文化財である。伝えたいねらいと内容が明確に描写されており、友達と一緒に見て共感する楽しさや、演者との交流が味わえる。
④人形劇	人が人形を操って演じさせる劇である。指で操るギニョール、糸で操るマリオネット、一体の人形を何人かの手で操るものなどがある。人形劇は、人形と演じている人の声、情景などからイメージを膨らませ、お話の世界に入り込むことができる。その中で、幼児は生き生きとした命を感じ、ワクワク、ドキドキ楽しみながら、人形と一体感を持ったり、自分と重ね合わせたりする経験ができる。

⑤ペープサート	歌や絵本，童話などをもとにしたり，イメージしたものをそのまま絵として表現することができる。紙に描いた絵を切り抜き，割り箸などの棒にセロハンテープでつけただけで簡単に作れ，それらの人形を移動・反転・転画しながら展開する紙人形劇である。幼児でも簡単に作れ，すぐに遊べるのが魅力である。
⑥エプロンシアター	舞台に見立てた胸あて式エプロンに物語の背景とマジックテープを縫い付け，演じ手がポケットから人形を取り出してエプロンに貼り付けながら物語を演じる人形劇である。演者と子どもが間近で対面し，互いにやり取りしながら，表情や身振りを加えて演ずるので，一体的な語りのできるのが特徴である。

3 協同する表現活動とは

(1) 個の遊びから集団の遊びへ

入園当初の幼児は，一人一人がそれぞれの見立てを楽しんだり，自分が物語の登場人物になって振る舞うことによって一人で満足したりする姿が多く見られる。同じ場にながらも，あるいは同じものに触れながらも，そこからイメージすることは，一人一人異なっている。

『要領解説』に「幼稚園の中で，一緒に生活を重ね，共通の経験や感動を伝え合う中で，幼児は次第にイメージを共有し合い，そして，相手と一緒に見立てをし，役割を相互に決めて，それらしく動くことを楽しむようになる。（中略）さらに，それぞれのイメージを相手にわかるように表現し，共有して，共通のストーリーやルールをつくり出し，「〇〇ごっこをしよう」などと遊ぶことができるようになってくる」とあるように，はじめは個の遊びから徐々にグループ，集団へと遊びが広がり，協同する表現活動に発展していくと考える。幼児の表現活動は今まで経験した遊び体験の蓄積や教師の模倣，また配置された環境，援助の下に行われることで新しい発想が生まれ，創作活動へと広がっていく。そしてその活動に幼児が興味関心をいだき，「やってみたい」という願望が「やってみよう」という意欲へとつながる。

本研究では，幼児の興味関心が，他の幼児とつながる中で，自分の考えを表したり友達を受け入れたりする経験をし，楽しさを共有していく過程を大切にしていきたい。ながら協同する表現活動を進めていきたい。

4 表現することを楽しむために

(1) 表現するために必要な要素

人は自分の思いや考えを表現することにより，自分という存在を確かめたり他者との関係を築いたりする。『保育用語辞典第5版』によると，「表現はいわば，人が人らしく生きていくうえで欠かせない能力であり，表現教育とはそうした能力を様々な表現活動や日常生活全般を通して豊かに育てることである」とされる。特に幼児の場合，「生活の中に心を動かす体験やそれを伝えたいと思う人間関係が豊かにあること，そして，その表しや表れを受け止められることが重要になる」といわ

れる。つまり、幼児の表現意欲を引き出すためには、幼児が心を動かされる環境や安心して過ごすことができる環境（人的・物的・空間的）を構成していくことが大切であると言える。かかわりたくなる環境があってこそ、幼児の中で自己肯定感が育まれて、幼児は伸び伸びと自分を表現するようになるのではないか。幼児が伸び伸びと自分を表現でき、能動的に周囲の環境とかかわって自分なりの表現を楽しむことができるようになるために、教師自身が幼児の表現を捉える視点をしっかりと持ち、具体的な援助の方法や環境構成の工夫について常に模索する必要がある。

(2) 表現を育てる教師の援助と環境構成

教師の援助には、言葉かけや表情、動きなど様々な方法がある。そこで、『幼児教育の方法』『幼稚園教育要領解説』を参考に教師の有効な手だてを表2にまとめた。

表2 様々な教師の援助

方法	○援助・環境構成のポイント
動き	○子どもと一緒に身体を動かして遊ぶ。教師がモデルとなる。 ○言葉だけで伝えるのではなく、行動で示す援助。
表情 うなずき 態度	○温かく見守り、笑顔、励ましやうなずきなど、子どもに寄り添う。 ○子どもの言葉に耳を傾ける。 ○言葉以外の様々な表現も受容し、受け止める。
言葉かけ	○遊びのきっかけとなるような具体的な言葉をさりげなくかけてみる。 ○子どもの感動を周りにも伝える。 ○上手、下手での評価にならないようにする。
場の設定	○感じること、心を動かすことができるような場の設定。 ○子どもの思いとともに、子どもと一緒に作り出し、変えていける環境。 ○興味を持ったときにすぐに取りかけられるような環境の準備。
時間の保証	○遊びを続けたい気持ちを受け止められるような時間設定。
遊具・材料	○子どもの状況を見ながら、活動の発展を予測し、材料や道具の準備をする。 ○子どもの活動に合わせ、配置を考える。

(3) 家庭との連携

幼稚園教育指導資料第2集『家庭との連携を図るために』の中で、「幼児の家庭や地域での生活経験が幼稚園において教師や他の幼児と生活する中で更に豊かなものとなり、幼稚園生活で培われたものが家庭や地域社会での生活に生かされているという循環の中で幼児の望ましい発達を図られていく」と述べられている。このことから、幼稚園と家庭が力を合わせ幼児の生活を充実したものにし、その発達を促していくことが大切だと考える。

家庭との連携に当たっては、「家庭の協力を必要とする具体的な一つ一つの事柄について、それが幼児の発達にどのような意味をもつのかを幼稚園と家庭と一緒に考え合うことが必要です。そのことによって、保護者と教師との間に同じ幼児を大

切に思う者同士としての信頼関係が築かれ、心のつながりが生まれてきます。この心のつながりこそが、幼稚園と家庭との連携の大きな推進力となり、また望ましい連携を実現する基盤となるのです」とある。

そこで、保護者へクラス便りなどを通して本研究の内容を伝え、児童文化財を活用した幼稚園での取り組みを紹介していく。そして、保護者の協力も得ながら幼児の生活を充実したものにし、その発達を促していく中で共に幼児の育ちを分かち合いたい。

5 幼児の実態把握と分析

(1) 実態調査アンケートについて

① 調査目的

幼児の家庭での遊びの様子の実態把握をし、本研究の資料として役立てる。

② 調査対象

宜野湾幼稚園たんぽぽ組（5歳児）30名の保護者（回収率：80%）

③ 調査日：平成27年11月6日

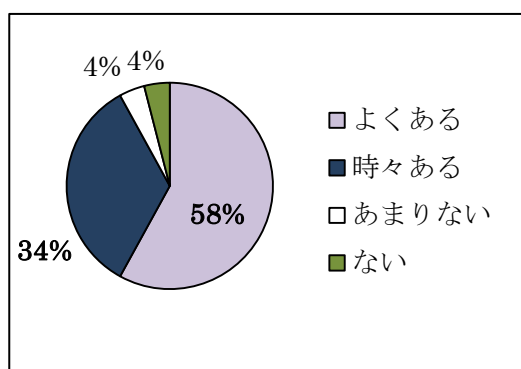
(2) アンケートの結果と考察

右のグラフにあるように、問1の質問では「よくある」「時々ある」を合わせると92%という高い数字を示している。他の質問で「お子さんはお絵かきをして遊びますか。」では88%、「お子さんは牛乳パックや空き箱、チラシなど、身近にある物で何かを作って遊びますか。」では92%となった。この数字は歌やダンス、お絵かきなどが子どもにとって身近な表現方法であることを物語っている。また、幼稚園での活動が家庭でもいかされていることから、幼稚園の役割の重要性が伺える。

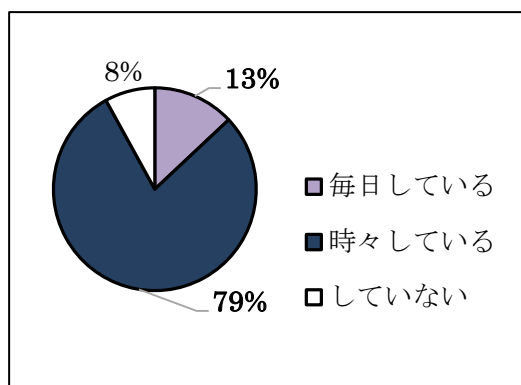
問2の質問では「毎日している」「時々している」を合わせると92%と高く、保護者の絵本に対する意識の高さを知ることができた。

実態調査から考察すると、家庭における幼児の表現の育ちの素地は整っているといえる。これからの研究を通して、より保護者の意識を高めていけるようにしていきたい。

問1 お子さんは幼稚園で覚えた歌や手遊び、ダンスを歌ったり、踊ったりしますか。



問2 お子さんに絵本の読み聞かせをしていますか。



V 検証保育

検証保育指導案

平成27年12月21日(月)
男児15名女児15名 計30名
保育者 角本 伸枝
指導助言者 安里美佐子

- 1 主な活動名 作った物で表現しよう
- 2 ねらい ○自分なりに表現する楽しさを味わう。
○友達とペープサートをして楽しさを共有する。
- 3 内容 ・「あのやまこえて」のお話を、ペープサートで楽しく表現する。
・友達が作ったお話を聞いたり、ペープサートを見たりする。

4 活動設定の理由

様々な児童文化財を活用する中で、特にペープサートを作って遊ぶ幼児が多く見られた。作って楽しむことから、動かして楽しむようになり、次第に作った動物や人、物でお話を作ってイメージを膨らませて楽しむようになった。その様子を見ていた周囲の子どもが、自分もやってみたいと興味を示したことから、クラスでペープサート作りがはじまった。活動を進める中で、イメージを膨らませ、自分なりに表現して作った物を誰かに見てもらいたいという気持ちが高まっている幼児が多い。

そこで作った物を友達や周囲の人に見せることで、より表現することの楽しさを感じられるのではないかと考える。また、友達の表現する姿や作品を見ることで、さらなる表現意欲や豊かな表現にもつながると考え、本活動を設定した。

(1) 教材観

絵本、ペープサート、紙芝居、エプロンシアター、人形などの様々な児童文化財に触れる中、子どもが特に興味を持った絵本「あのやまこえて」とペープサートを活用することにした。

「あのやまこえて」は歌遊び絵本である。このお話の中に子どもの知っている動物を登場させ、イメージを膨らませお話をアレンジし、ペープサートで表現する。

ペープサートはイメージしたものをそのまま絵として表現することができ、幼児にとって表現しやすく簡単に作ることができる文化財である。自分のイメージをペープサートにして表現することで相手に伝える喜びを味わうことができると考える。また、見る側もペープサートを見るだけで、お話の内容が分かりイメージの共有がしやすくなると考える。

(2) 幼児観

12月のはじめに生活発表会で歌ったり踊ったりする経験をしたことで、表現する楽しさを感じている子が増えてきている。また、これまでの検証期間を通して、感じたことやイメージしたことを言葉や動作で表すことを楽しんだり、自分で作って表現する楽しさを感じる姿が見られた。一方、やりたいという気持ちはあるが、誘ってもやろうとしない子、側で見て楽しんでいる子もいるなど個人差がある。

そこで、本時ではこれまでの活動を表現し合う場を設定する。友達と一緒に表現し、見せ合うことで友達の表現を受け止め、イメージを共有することができ、どの子も表現する楽しさを味わうことができるような活動にしていきたい。

(3) 指導観

子どもが作った物で表現したいという気持ちを大切に、自分なりの表現を楽しめるような雰囲気づくりを心掛ける。その中で、自分らしさを発揮し、持っているイメージや思いを十分に表現できるように援助していきたい。

(4) 活動計画

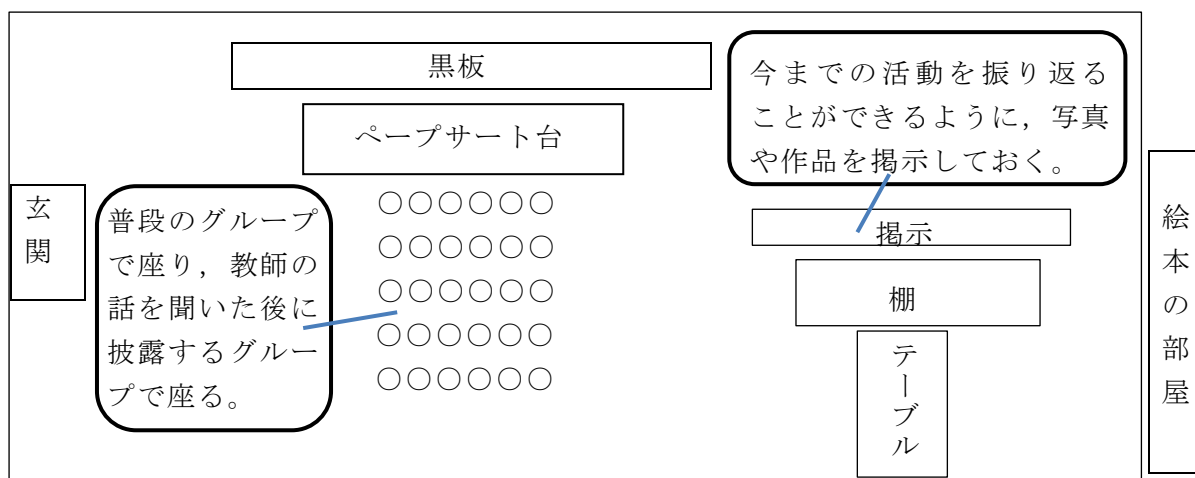
月日	○ねらい	・活動内容	◎教師の援助 ☆環境構成
11月16日～ 20日 (帰りの時間 の前に)	○自分 なり のイ メー ジ を 言 葉 や 動 き で 表 す こ と を 楽 し む。	・エプロンシアター「おおきなかぶ」を見る。 ・教師の動きや声を真似て一緒にやってみる。	◎表情や身振りを加えながら、子どもとのやり取りを大切にし、お話を進めていくようにする。 ☆子どもが実際に触れて遊ぶことができるように、エプロンシアター、絵本を配置しておく。
	○表 情 や 、 身 体 を 動 か し て 表 現 す こ と を 楽 し む。	・「だるまさんが」の絵本を見る。 ・動きなどで自分なりに表現する。	◎子どもが自分なりにイメージを膨らませて絵本を見ることができるよう、表情を見ながら読み進める。 ◎子どもがそれぞれに感じたことを表現する様子を受けとめる。 ☆いつでも絵本に触れられるように配置しておく。
11月24日～ 27日 (帰りの時間 の前に)	○イ メー ジ を 膨 ら ま せ 、 自 分 な り に 感 じ た こ と や 思 っ た こ と を 声 に 出 し て 表 す。	・人形との会話を楽しむ。 ・「あかいふうせん」(文字のない絵本)を見る。 ・絵を見てイメージを膨らませながら言葉を発する。	◎子どもが絵をじっくり見てイメージを膨らませ、思い思いに言葉を発することができるよう、めくる速さやタイミングに気をつける。 ◎子どもの発した言葉に、うなずいたり、時には教師が子どもの発した言葉を繰り返すことで、周囲の子どもにも伝わり、共有できるようにする。 ☆人形や絵本を子どもが触れて楽しめるようにしておく。
12月8日～9日 (おやつ後)	○自 分 な り に イ メー ジ を 膨 ら ま せ て 楽 し む。	・「あのやまこえて」の絵本を見る。 ・「あのやまこえて」のペープサートを動かして遊ぶ。	◎リズムよく読み進めながら、子どもが自然に唱えることができるような雰囲気を作る。 ◎ペープサートを動かしながら見せることで、イメージが膨らむようにする。 ◎ペープサートに興味を持った子どもが触れて遊べる時間を作る。

<p>12月14日～ 18日 (好きな遊びの時間)</p>	<p>絵、造形などで表すことを楽しむ。 ○自分なりのイメージを動きや言葉、</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が作った紙芝居「ももたろうのゆくえ」を見る。 ・自分の作りたい物（絵本・紙芝居・エプロンシアター・人形・ペープサートなど）を作って遊ぶ。 	<p>☆普段は職員室にある紙芝居を子どもが触れることができるように環境を作る。</p> <p>☆子ども同士で楽しめるように紙芝居台やペープサート舞台を配置する。また、自分達で作って楽しめるように必要な材料を準備しておく。</p> <p>◎子どもの作りたい、やってみたいという気持ちを受け止め、一緒に作ったり、作った物で遊びながら互いに楽しさを共有することができるように援助する。</p>
<p>12月14日～ 15日 (クラス活動)</p>	<p>とを動きや言葉、絵、造形などで表すことを楽しむ。 ○友達と一緒にイメージしたこ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「あのやまこえて」のペープサートをみんなで作る。 ・作ったペープサートを友達と一緒に楽しむ。 	<p>◎自分の考えや思いを伝え、友達とイメージを共有しながら、ペープサート作りができるようにする。</p> <p>◎一人一人の表現を受け止めたり他の幼児の表現にも気付かせるような言葉かけをしたりする。</p> <p>☆子どもが自由に描いたり作ったりできるように、画用紙、折り紙、割り箸、リボン、空き箱などいろいろな材料を準備する。</p>
<p>公開保育 12月21日 本時</p>	<p>○自分なりに表現する楽しさを味わう。 ○友達とペープサートをして楽しさを共有する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「あのやまこえて」のペープサートを紹介し合う。 ・今までに自分達で作った物を紹介する。 	<p>◎友達と協力して楽しく披露できるように見守りながら、必要に応じて声掛けなどの援助をしていく。</p> <p>☆今までの遊びの様子を振り返ることができるように、写真などを掲示しておく。</p> <p>☆自分達で準備ができるようにペープサート舞台やCDラジカセを準備しておく。</p>
<p>1月～</p>	<p>○忍者になりきって表現することを楽しむ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「わんぱくだんのにんじゃごっこ」の絵本を見る。 ・忍者ごっこをする。 	<p>◎子どもが自分なりにイメージを膨らませて絵本を見ることができるよう、表情を見ながら丁寧に読み進める。</p> <p>◎教師も子どもと一緒に忍者ごっこを楽しみ共に表現し合う中で、共感したり刺激を与えたりする。</p> <p>☆巧技台やゆらゆら橋などを用意する。</p>

(5) 本時の指導案

指導案平成27年12月21日(月)		たんぽぽ組 男児15名 女児15名 計30名 保育者：角本 伸枝	
<主な活動名>		作った物で表現しよう	
研究 仮 説	園生活の中で、身近にある絵本や紙芝居などの児童文化財に触れ、イメージを共有する経験を重ねながら自分なりに表現したり、仲間と協同して表現したりする活動を展開することで、より表現する楽しさを味わうことができるであろう。		
ね ら い	○自分なりに表現する楽しさを味わう。 ○友達とペープサートをして楽しさを共有する。	内 容	・「あのやまこえて」のお話を、ペープサートで楽しく表現する。 ・友達が作ったお話を聞いたり、ペープサートを見たりする。
時間	○予想される 幼児の姿	◎教師の援助と☆環境構成	
10:00	○「赤鼻のトナカイ」の手話ソングを楽しむ。 ○前に出て手話ソングを披露する。 ○今までの活動を振り返る。	☆幼児が操作できるように、CDラジカセを準備しておく。 ◎小さい先生になって前に出て楽しむ姿を認め、教師も一緒に楽しむ。 ◎今までの活動を振り返り、今日の活動について話をし、幼児の表現意欲を高めるようにする。 ☆事前にペープサート舞台や紙芝居台など、見せ合う場で必要な道具類を準備しておく。	
10:10	○友達と一緒に作ったペープサートを見せる。 ○友達と協力して楽しく披露する。 ○恥ずかしがって、声が小さくなったり、動作が小さくなったりする。 ○友達が披露している様子を見たり、一緒に口ずさんだりする。	☆幼児が作ったお話を画用紙に書いて準備しそれを見せながら、みんなで楽しむことができるようにする。 ◎友達のアイデアを認め、共感できるよう、教師がモデルとなって幼児の思いを受け入れる。 ◎幼児がイメージした事を丁寧にくみ取り、他の幼児にも刺激となるよう配慮する。 ◎友達と協力して楽しく披露できるように見守りながら、必要に応じて声かけなどの援助をする。 ◎出来る出来ないではなく、やろうとする姿を認め、表現する意欲につながるように励ます。 ◎友達と協力して作った満足感や充実感を味わえるようにする。	
10:35	○今までに作った物を紹介する。	◎好きな遊びの時間に作った物を紹介したい子がいる場合は紹介する時間を設け、他児への刺激になるようにする。	
10:45	○片付けをする。	◎子どもと一緒にペープサート舞台や紙芝居台などを片づける。	
10:50	○今日の活動で楽しかったことや思ったことなどを発表する。	◎今日の活動で楽しかったことや思ったことなどを子どもから引き出し、明日以降の遊びにつながるようにする。	
評 価 の 観 点	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が表現したいと思えるような話の進め方や雰囲気作りができたか。 ・幼児が自己を発揮し、楽しんで表現できるような援助や声かけができたか。 ・幼児同士が共感しながら活動できるような援助ができたか。 		

本時の場の設定 たんぽぽ組環境図



5 検証保育研究会

(1) 保育者の反省

- ・作ったペープサートを自分なりに楽しんで表現している姿が見られたので良かった。
- ・作った物を見せ合うという設定であったが、普段の子どもの姿で気負うことなく伸び伸びと表現できるようにと心掛けた。声が小さかったり恥ずかしがって見ている側を飽きさせたりしないかと心配だったが、友達と一緒に作った「あのやまこえて」のお話とペープサートを楽しく元気いっぱい披露していた。恥ずかしがる子がいなかったということは、一人一人が自信をもって作った物を表現していたからではないかと考える。

(2) 意見及び感想

- ・場作り，雰囲気作りがとても良くできていた。
- ・教師も一緒に楽しんでおり，声かけの仕方も良かった。
- ・どの子どももっと発表したいという気持ちが出ていた。子どもから楽しかったという声が多く聞かれた。
- ・ペープサート舞台を固定する安全面の工夫が必要。
- ・就学に向けて，時計の読み方を長い針が11といった後に55分と正式な時間で伝えてあげることが必要ではないか。

(3) 指導助言（初任者研修講師 安里美佐子）

- ・戸外で好きな遊びを思い切り楽しみ，発散した後のクラスでの活動であったので，子どもが落ち着いており時間設定も良かったのではないか。
- ・皆で工夫したり，力を合わせて表現している姿が見られ，ねらいが達成されていた。
- ・ほとんどの子が前に出てきていた。それは自信を持つ子どもが多いということ。教師が認め，褒めることで子どもの自信につながる。4月からの教師の声掛けが子どもの自信につながっている。
- ・子どもに考えさせることは，子どもなりに責任を持つ（協同の良さ）。ストーリーを考えるというプロセスが子どもを育てる。

VI 仮説の検証

研究仮説について、検証保育における実践、幼児の姿や幼児の変容、保護者アンケートなどをもとに検証する。

1 児童文化財の活用

(1) 「おおきなかぶ」エプロンシアター

「おおきなかぶ」は前年度の生活発表会で4歳児がオペレッタで披露しており、持ちあがりの10名は「おおきなかぶ」のオペレッタを経験している。また、長年親しまれてきたお話ということもあってストーリーもよく知っている。

教師は表情や身振りを加え、子どもとのやり取りを大切にしながら進めていくようにする。そしてお話が終わった後は、エプロンシアターと絵本を子どもが実際に触れて遊ぶことができる場所に置いておく。

～幼児の姿から～

「おおきなかぶ。」と題名を言うとすぐに「いちご組の時にやったよ。」「見たことある。」と子ども達の声。「うんとこしょ、どっこいしょ。」とかけ声を言う場面になると、子どもも一緒になって声を出す。次第に、声だけでなく身体を揺らし、さも自分がかぶをひっぱっているかのような動作をしたり、前にいる友達をかぶに見立ててひっぱるなどお話の世界に入り込んでいる様子が見られた。

おおきなかぶがエプロンから飛び出すと「わあ、おっきい。」「バンザイ。」と両手を挙げ皆で喜び合う。その後、かぶの料理の仕方について話が広がった。

A「野菜炒め。」 B「チャーハンにしたんじゃない。」 C「こんな大きなかぶどんなして料理したのかな。」 D「お家に入らないし、重いよ。」 E「わかった、ドアをぎりぎりまで開ける。」 D「えー、お家が壊れるよ。」 F「あっ、わかった。のこぎりで切って家に入れるわけさー。」 G「うん、同じ。」などとイメージしたことを言葉で表し、共有し、共感し合う姿が見られた。

降園時には「うんとこしょ、どっこいしょ。」と言いながら帰る子や、翌日、実際にエプロンシアターを着て(図1)おおきなかぶを楽しむ子や、おおきなかぶの絵本を見る子(図2)の姿があった。

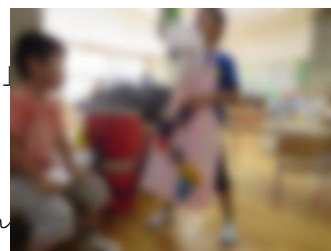


図1 エプロンシアターで遊ぶ幼児

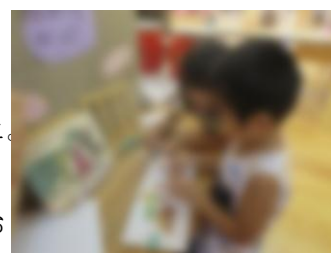


図2 おおきなかぶの絵本を見る幼児

～考察～

子どもの過去の経験や子どもがよく知っているお話の中から「おおきなかぶ」を題材に取り入れたことや、人形を使うエプロンシアターでお話をしたことにより、子どもの興味を引き付けることができ、イメージが膨らみ、言葉や身体で楽しく表現することができたと考える。また、お話の世界に入り込むことができたことで、お話が終わった後も、かぶ

の料理の仕方や、どのようにして家に運んだのかなど話が広がり、互いのイメージを共有し、共感し合う姿が見られたのではないかな。

(2) 絵本「だるまさんが」、字のない絵本「あかいふうせん」の読み聞かせ

絵本「だるまさんが」の読み聞かせは、子どもが自分なりにイメージを膨らませて見ることができるように、ゆっくり表情を見ながら読み進める。読み聞かせの後、絵本の動きを真似たり、自分なりにイメージして表現する遊びを取り入れる。

教師と一緒に身体を動かして表現を楽しみながら、子どもの声や動きを捉え、時には子どもの言葉を皆に伝えたり、表現している姿を紹介し、イメージを共有できるようにする。

～幼児の姿から～

絵本「だるまさんが」

「だるまさんが...」の言葉の次にだるまさんがどんな動きをするのかと期待し、だるまになったように身体を揺らしながらワクワクして見ている子ども達。「今度はみんながだるまさんになってみよう。」と声を掛けると、「ズデー」の言葉に合わせて足を広



図3 絵本の言葉を

身体で表現する幼児

「うちの猫はシャーていうよ。」
(ごろごろ寝転がったり、動きがゆっくりになる。) 教師「だるまさんがにわとりになりました。」 幼児「こけこっこー。」
(手を使ってくちばしと羽を表現する。)(図4) 教師「だるまさんがどろぼうになりました。」 幼児(ブレーメンの音楽隊のどろぼうの歌をうたいながら、胸を張って強そうに歩く。)

げて転がったり倒れたりする。(図3) 教師「今度はブレーメンの音楽隊に出てくる動物になってみよう。だるまさんがろばになりました。」 幼児「ばっばかばっばか。」「ひひ～ん。」(四つん這いになって歩く。) 教師「だるまさんが犬になりました。」 幼児「わんわん。」(四つん這いで膝を床につけて歩く。) 教師「だるまさんが猫になりました。」 幼児「にゃーお。」



図4 にわとりの表現をする幼児

字のない絵本「あかいふうせん」

絵本のページをゆっくりめくると、文字がないことに気づき「この絵本、字が書かれていないよ。」とざわつく。そのままページをめくると、絵を見て感じたことや思ったことを言い始めた。するとRが「みんなの言ったことを絵本の空いているところに書いたらいいんじゃない。」と提案。



図5 子ども達が文字を書いて作った絵本

後日、子どもの言った言葉をまとめて皆で字を書き、字のある絵本「あかいふうせん」ができた。

～考察～

絵本「だるまさんが」の読み聞かせでは、だるまさんの動きを真似て友達と楽しみながら表現している姿がほとんどであった。前回の「おおきなかぶ」のエプロンシアターを見たときには、声を出して身体で表現することを恥ずかしがってためらっていたYも初めは笑って見ているだけであったが、少しずつ自分なりに表現する姿が見られことは大きな収穫であった。字のない絵本「あかいふうせん」の読み聞かせでも、子どもが思い思いに感じたことや気づいたことを声に出し、伝え合う楽しさを感じていた。それは、同じような経験を繰り返すことで場の雰囲気慣れたり、友達とのイメージの共有が図れることで安心感を得られたからではないかと考える。

また、生活発表会でブレーメンの音楽隊のオペレッタをやることが決まり、練習を始めていたこともあって、お話に出てくる動物の表現遊びはイメージがしやすかったことが子どもの声や表現する姿から見てとれた。

子どもが伸び伸びと自分の表現を楽しむためには、同じような経験の繰り返しが有効であり、その中で教師がよりイメージしやすくなるような手立てを常に考えて子どもとかかわることが大切だということがわかった。

(3) うた絵本「あのやまこえて」読み聞かせ・ペープサート

リズムよく読み進めながら、子どもが自然に唱えることができるような雰囲気をつくる。また、教師が作ったペープサートを動かしながら読み進めることで、よりイメージが膨らむようにする。ペープサートと舞台はいつでも遊べるように配置しておく。

～幼児の姿から～

「〇〇さん〇〇さんどこいくの」と同じ言葉が繰り返され、リズムよく進んでいくので、子どもも自然と口ずさんでいる。

ペープサートを見せると「やりたい。」と興味を示す子が多い。はじめは振ったり持ったりしたままの子が多かったが、やっていくうちにお話に合わせて動かしたり、子ども同士で「はい、今くるっと回して。」と動きを考えて楽しむ姿が見られた。

自分で作ってみたいと教師の描いたペープサートを真似て描く子や、自分なりにイメージして描いて、ストーリーを考えて楽しむ子がでてきた。

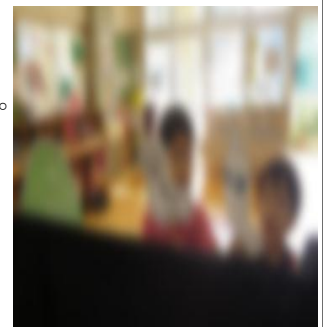


図6 作ったペープサートで遊ぶ幼児

～考察～

歌遊び絵本『あのやまこえて』のペープサートを準備したことで、見るだけでなく「やってみたい」という願望が生まれ「やってみよう」という意欲へとつながったのではないか。実際にペープサートを動かして遊ぶ中で、「作ってみたい」と自分なりにイメージして描いて、ストーリーを考えて楽しむ子がでてきたことは、友達と声をかけ合って一緒に動かして楽しむ経験がきっかけになったと思われる。

2 協同する表現活動

(1) 「もりのくまさん」のペープサート（自然発生的に生まれた協同する活動）

～幼児の姿から～

ペープサート作りに必要な道具を前日に準備しておき、環境を整えておく。翌日、登園してすぐに、数名の子がペープサート作りを始めた。それぞれ好きな絵を描いてペープサートにして遊んでいる。くまのペープサートを作る子がいたので『もりのくまさん』の曲を流すと、歌詞に合わせて森を作る子、花を作る子など協力して作る姿が見られた。しばらくすると、歌に出てくるお嬢



図7 製作の様子

さんがいないことに気付いた子が「あっ、モンちゃんも仲間に入れてあげよう。」と4月から読み聞かせの前や、お話によく登場してくる指人形のモンちゃんを持ってきた。

みんなは元気よく『もりのくまさん』の歌をうたい、モンちゃんに自分達で作った赤い頭巾をかぶせたり、エプロンを着せたりしながら楽しんでいる。モンちゃんの持つカゴには小さなペットボトルの葡萄酒、折り紙で作った飴玉、ネックレスが入っている。みんなのイメージはいつの間にか赤ずきんちゃんになっていた。「なんかモンちゃん赤ずきんちゃんみたいだねー。」と笑って話している。

作ったペープサートの出す順番や動かし方を考えたりしながら遊んでいるうちに、子どもから「みんなに見せたい。」との声が上がった。「いいね、お客さん呼びたいね。」と答えると「ちょっとリハーサルしよう。」「みんなに内緒で秘密の特訓してこよう。」と誰もいないホールで練習を始める。数日間は、教師も音響を手伝ったりしていたが、次第に教師がいなくても「もりのくまさんチーム集まって。」と声をかけ合い職員室を借りて歌や動きの練習をするなど自分達で意欲的に取り組む姿が見られた。

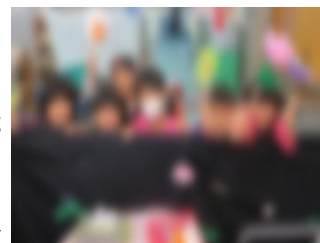


図8 秘密の特訓の様子

～考察～

生活発表会で多くのお客さんを前に歌やダンス、オペレッタなどを披露し、見てもらえる嬉しさや喜びを味わう経験をしたことは、子どもにとって大きな自信となったことが子どもの様子から伺えた。

しばらくして、子どもから自分達で作った物を披露したいとの声があり、教師がいなくても自主的に場所を借りて練習を始めた。自分達の生活を自分達で作って楽しんだりする姿はとても頼もしく、自信に満ちあふれていた。経験の蓄積と、自分達の遊びがじっくりできる時間が保証され、遊び込めたことが自然発生的に協同する活動につながった。

(2) 「あのやまこえて」のお話を作ろう（教師が意図して行なった協同する活動）

もりのくまさんチームの子ども達が、友達と協力してペープサート作りをする中で、伸び伸びと表現を楽しむ姿が見られた。そこで、クラスのみんなが協同する表現活動を

通して表現する楽しさを味わい、友達とかかわることの楽しさを感じてほしいとの教師の思いから、クラスみんなで取り組む表現活動を進めていった。教材は検証保育の中で使用した歌遊び絵本「あのやまこえて」を使う。

～幼児の姿から～

①作りたい動物を選び、チームで協力してお話を作り、ペープサートにして表現する。それぞれのチームに分かれ、話し合いが始まった。カンガルーチームはカンガルーの絵が描けないと困っていたが、みんなで絵本の部屋に行き、動物図鑑からカンガルーの写真を見つけ、(図9)図鑑を見ながら一生懸命に描いていた。



図9 図鑑でカンガルーを探す幼児



パンダチームは、それぞれが考えたお話を紙に書き、その中から2つ選んで作っていた。イメージを膨らませて絵に描いたり、友達と相談しながらリボンなどを使ってイメージを形にしていくなど工夫している様子が見られた。(図10)

②ペープサートが出来上がり嬉しそうなK。しばらくするともうできないよ。」と怒っている。「どうしたの。」と聞くと、「手は2つしかないのに、キリンと葉っぱと雨3つも持てないよ。」と話す。「困ったね、キリンチームのみんなに相談してみたら。」と伝えるが、みんなを集めることができずにいるK。教師がみんなを集めKの困っていることを話してもらおう。すると「雨降らすときはRが持つよ。」とRが快く引き受けてくれた。Kは「ありがとうございます。」と嬉しそうにお礼を言った。

～考察～

興味や関心を基に、友達との対話や話し合いの場を意図的に設けることで、子どもは思いを共有するとともに目的意識を持って活動を始める。そして、協力の必要なことに気づき、一緒に取り組み、やり遂げたいという気持ちが高まってくると、達成感や満足感だけではなく、集団の中で起こる友達との葛藤や自分自身の中での葛藤など、困難な場面にも向き合いながら、自主的に活動を進めていくことができるようになる。教師が意図して行なった協同する活動の中にそれが見てとれた。

一人ではできないことに友達と一緒に挑戦したり、実現のために協力したり、アイデアを出し合ったりしながら活動を進めていく協同する表現活動で、より表現する楽しさを味わうことができた。

(3)表現することの楽しさを感じて(「みんなに見せたい」気持ちの高まり)

(ア)誕生会の出し物披露

自分達で作ったペープサートをみんなに見せたいと毎日練習しているもりのくまさんチームに、誕生会の出し物でペープサートを披露しないかと提案する。

～幼児の姿から～

もりのくまさんチームは誕生会に向けて今まで以上に張り切って練習に取り組み始めた。クラスみんなに、誕生会にもりのくまさんチームが出し物を披露することを話すと、自分達も赤鼻のトナカイの手話ソングを披露したいと、どの子もやる気を見せる。誕生会当日は、クラス全員で手話ソングを披露し、もりのくまさんチームは音響、道具の準備すべて自分達で進めており、披露した後はとても満足した様子であった。

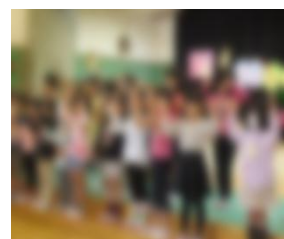


図11 手話ソング披露

(イ) 作った物で表現しよう (検証保育)

もりのくまさんチームの誕生会での出し物披露をきっかけに、他の子どもも自分達で作った物を見せたいという気持ちが高まってきているように感じた。そこで、これまでの活動を表現し合う場を設定する。子どもの表現したいという気持ちを大切にし、自分なりの表現を楽しめるような雰囲気作りを心掛ける。

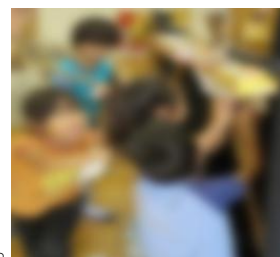
また、今までの活動の写真や作品を掲示するなどして活動の振り返りができるように環境を整える。



図12 活動の写真を掲示

～幼児の姿から～

赤鼻のトナカイの曲を流すと、ほとんどの子が前に出て手話ソングを披露している。歌遊び絵本『あのやまこえて』のお話をチームで考え、ペープサートで披露する場では、ペープサート舞台の裏で友達と声をかけ合い、伸び伸びと表現する姿が見られ、見る側、見せる側どちらの子どもも楽しんで参加している姿があった。



今日の活動の振り返りでは 図13 楽しんで表現する姿「Rの赤ちゃんが、おもちゃもらってわーいわーいって喜ぶところがおもしろかった。」「みんなに見てもらえて、嬉しかった。」との感想が聞かれた。

図14 友達の表現を集中して見ている幼児

～考察～

子どもが生き生きと自分の作った物で表現する姿が見られた。それは、子どもの作った物で表現したいという気持ちを教師がくみ取り、思いを実現することができたからではないか。自分の表現を見てもらうことの喜びを感じ、友達表現を見ることで相手の良さに気付き、友達と一緒に遊ぶ事の楽しさを感じることができた。どの子も喜んで参加し、「楽

しかった。」との声が多かったことは、表現することの楽しさを感じ、充実感を得たことの表れではないかと思われる。

3 検証のまとめ

児童文化財を活用することで、イメージを膨らませることができ、子ども同士のイメージの共有にもプラスの効果をもたらした。また、児童文化財を活用し、協同する活動を進める中で、表現する楽しさを感じることができた。

保護者アンケートの実態調査によって、ありのままの幼児の表現を捉え、一人一人の幼児や学級の実態に応じた環境構成や教師のかかわり方を工夫することができた。

検証保育後の保護者アンケートでは、「お子さんが成長したなど感じる点、気づいた事」を聞いたところ、「人前で表現する機会がなかったので、表現することは苦手かと思っていたが、意外にも皆の前で発言したり表現する姿を見て嬉しく思った」「家で人形や脚本を作って、自作の劇をするようになった。想像力が豊かになったような気がする」などの声があった。保護者の声からも子ども達が表現する喜びや楽しさを感じていることが確認できた。

以上のことから、園生活の中で身近にある絵本や紙芝居などの児童文化財に触れ、イメージを共有する経験を重ねながら、自分なりに表現したり仲間と協同して表現したりする活動を展開することで、より表現する楽しさを味わうことができたといえる。

Ⅶ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 子どもの興味や発達に即した児童文化財の活用を通して、自分の思いや考えを言葉や身体、描いたり作ったりするなど様々な形で表現することができ、表現する楽しさを感じることができた。
- (2) 教材を工夫し、環境を整えることで、子どもが興味関心を持ち、イメージを膨らませていくことができた。また、自らかかわって表現活動を楽しむ姿が見られた。

2 今後の課題

- (1) 互いに刺激を受けながら表現を豊かにしていく過程を大切にし、子どもが自己表現を楽しめるよう、今後も具体的な援助の方法や環境構成の工夫について模索していく。
- (2) 年長児だけでなく年中児（4歳児）の発達段階における表現方法についても研究を深め、系統だてた表現の指導ができるようにしていく。

<主な参考文献>

- 西久保礼造・石川章子著 1985 『絵本，童話，紙しばいの指導』 ぎょうせい
文部科学省 2008 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
森上史朗・柏女霊峰編 2009 『保育用語辞典第5版』 ミネルヴァ書房
無藤隆監修/浜口順子編 2012 『事例で学ぶ保育内容 領域 表現』 萌文書林